

低湿地開発の進展と庄園返還運動

－ 九世紀の阿波国新島庄 －

丸 山 幸 彦

は じ め に

仁平三年（一一五三）の東大寺庄園目録¹には新島庄関係文書は次のように整理されている。

阿波国

新島庄

一卷一枚	天平勝宝八年（七五六）	寺牒国判	…（１）
一卷三枚	承和七年（八四〇）	国司免判	…（２）
一卷二枚	承和一二年（八四五）	被妨取圍寺帳	…（３）
一卷九枚	無年号	国図坪付	…（４）
一卷二枚	嘉祥三年（八五〇）	庄家坪付	…（５）
一卷二枚	天元二年（九七九）	庄官坪付	…（６）
一卷一枚	寛和三年（九八七）	寺家下文	…（７）
一帖	天平宝字二年（七五八）	帛絵図	…（８）

1・2・5・7・8が庄券1・同2・同5・同7および庄絵図として東南院文書中に現存する²。すでに別稿でこの新島庄が吉野川下流域の低湿地上に設定された三つの地区からなりたっていること、及びそのそれぞれの地区の位置比定を八世紀中期の新島庄成立時点进行分析の中心にすえておこなった³。

ただ、七五〇年代の立券直後の動きをしめす天平宝字二年枚方地区絵図を最後にして、九世紀にかけての新島庄にかかわる史料は姿を消し、したがってこの庄が以後どのような展開をとげていったのかは不明のまま推移する。そして立券以後ほぼ百年たった八四〇～五〇年代にいたり再び文書の上の新島庄が姿をあらわす。これが上記目録中の2～5の文書群であり、この時期がこの庄にとって立庄につぐ大きな変動期にあったことをうかがわせる。その変動とは何でありその時点の新島庄はどのような状況になっていたのか、それについて庄券第二の国司解状⁴についてみていきたい。

1、仁平三年四月二九日 東大寺諸庄園文書目録（平安遺文六－二七八三）

2、『大日本古文書家わけ第十東大寺文書』第二巻所収

3、「古代の大河川下流域における開発と交易の進展－阿波国新島庄をめぐる－」（『徳島大学総合科学部紀要第二巻（人文・芸術研究編）』（一九八九）所収）

4、承和七年六月二五日 阿波国司解（『大日本古文書東大寺文書之二（東南院文書之二）』（以下東南院文書二のごとく略す）－五三〇）

阿波国司解 申返抄事

使東大寺別当内豎正六位上石川朝臣真主

右、被太政官去承和五年九月五日符曰、為実録東大寺地、件人充使發遣、国宜承知、国司与使者共令勘申者、謹依符旨奉行已訖、仍即附真主、謹解、

承和七年六月二十五日

…下略…

承和五年（八三八）九月、太政官は東大寺地を実録するために使を派遣することを指示する。そして承和七年にいたり石川真主が寺使として阿波に派遣され、阿波国司とともに東大寺地の実録を実施したことを報告しているのがこの返抄（解状）である。注意すべきは、この承和五年の東大寺地の実録を命じた官符は阿波のみを対象にだされたものではないことである。それについて、次の史料をみたい。

因幡国司解 申返抄事

使東大寺別当内豎正六位上石川朝臣真主

右、太政官去承和五年九月五日符、今年七月九日到来曰、得東大寺牒曰、寺家墾田陸田毎国有数、而頃年差寺使令勘、或為王臣地、或為百姓田、今為実録、件人充使發遣、望請、蒙下符將勘紕者、被右大臣宣曰、宜下知国司、与使者共令勘申者、諸国承知、依宣行之者、謹依符旨奉行已訖、仍附使真主返抄、謹解、

承和九年七月二十日

…下略…

二年後であるが、同じ承和五年九月官符をうけて同じ真主が因幡国に派遣されている。ここでは承和五年九月の官符が詳細に引用されており、この官符が東大寺の要請をうけ太政官が東大寺地のうち王臣地になったり百姓田になっている地についての実録を命じたものであったことがあきらかになる。

さらに関連して、大治五年（一一三〇）三月「東大寺諸庄文書并絵図目録」には国別に庄園関係文書が整理されているが、それによると伊予国に「承和七年七月十一日郡司勘定文」があり、また播磨国は「承和九年八月十五日依官符国司勘定」が記載されている。文書が現存していないので内容は不明であるが、承和七年六月に阿波で新島庄の回復にかかわる国司返抄が作成されているのに対応して、翌月の七月に伊予で郡司の勘文が作成されている。同様に承和九年九月因幡で高庭庄にかかわる国司返抄や解状が作成されているのに対応して前の月の八月に播磨で国司の勘定がなされていることになる。

造東大寺司（東大寺）の庄園としては伊予国には新居庄、播磨国には赤穂塩山や益気庄などが八世紀中期には存在していた。このことからみて、播磨・伊予二国においてもこれら諸庄にかかわって承和五年官符にもとづく動きがなされているのであり、文書目録にあらわれる国・郡司の勘定について

5、承和九年七月二〇日 因幡国司解（東南院文書二一五四〇）。なお高庭庄については、拙稿「古代における水上交通と庄園とのかかわりについて－因幡国高庭庄を中心に－」（『徳島大学総合科学部紀要第六巻（人文・芸術研究編、一九九三年）を参照。

6、平安遺文五二一五六・二一五七

は後に新島・高庭両庄でも庄域調査にかかわる文書が国衙の手で作成されているが、それと同類の文書類とみてよいであろう。すなわち承和五年九月官符をうけて承和七年には阿波および伊予という四国地域で、同九年には因幡および播磨という中国地域で東大寺の庄園回復運動が展開しているのである。

なお、中四国地域でこれら四カ国以外に八世紀中期に造東大寺司の庄園の存在が確認されるのは周防・備後・備中・備前であるが、それら諸国については、九世紀中期における庄園の存在及び回復運動の存在の有無は不明である。さらにこの承和五年九月官符にもとづく東大寺の庄園回復運動が中四国地域以外の東大寺の庄園においてもなされていたのかどうかは史料上は全く見あたらないために不明である。ただ、いずれにせよ八四〇～五〇年代の新島庄は高庭庄などともに東大寺が中・四国地域を中心に試みている庄園回復運動の対象になっているのであり、上記一連の史料はこの運動にかかわって出されたものとして位置づけてよいのである。以下、東大寺が試みた庄園回復運動はこの新島庄においてはどのように具体化されたのかをみることを通して、九世紀中期のこの庄の現況および八世紀中期からここにいたる間の庄の展開の状況についてみていきたい。

一、承和七年の庄域調査

上記の返抄のように承和七年六月に阿波で東大寺地の実録すなわち新島庄の庄域調査がおこなわれる。高庭庄の場合、二年後の承和九年七月に実録がおこなわれているが、ここでは相前後して承和九年七月二四日因幡国司解状⁷、同年七月二一日高庭庄預僧靈俊解状⁸、の二通の文書がだされている。前者は二人の貴族の庄地に転化している高庭庄本体部分について（散田地と称されている）、国衙が高庭庄立券文と国図とを照合して国図上で確認される立券文記載地を坪単位に書き上げているものである。ここには「依符旨、検図并券、条録」とあり、符旨すなわち承和五年官符でいう東大寺地の実録の指示にもとづいて、承和九年の時点で高庭庄庄地の詳しい調査が坪単位で行なわれていることがしめされている。そして後者は東大寺が高庭庄庄地として引き続き確保している耕地（定田と称されている）の現況について庄預が坪単位の書き上げを行ったものである。二通とも真主の要請で高庭庄の実状を把握するために作成されたものであり、上に掲げた因幡国司返抄はこのような精密な庄域調査がなされたことを背景にして出されたものである。

そして承和七年の阿波の場合、六月二五日に国司返抄がだされている以上、詳しい庄域調査がなされたはずである。しかし高庭庄の場合と異なり、その庄域の調査がどのようになされたのかを直接にしめす文書は存在しない。ただ、注目したいのは庄券第二に収められている次の承和一二年の阿波国牒⁹である。

7、東南院文書二一五三九

8、東南院文書二一五三八

9、承和十一年一〇月一一日 阿波国牒（東南院文書二一五三一）

阿波国牒 東大寺衙

不得勘徴園地子事

一新嶋地壹拾町參段壹百六十四歩

右園、以去承和七年可返入寺之状被言上矣、但校田目録申官之後解文也、即盛班百姓口分、来年可班改、然後可徴地子、

一大豆津園參町貳段

右地、未改口分之間、同右件、以来年可勘地子、

一勝浦郡地參拾九町

右地、自昔為江洲、公私無利、不由徴地子、使等所明、

以前等畠地子、依去九月七日牒状可勘徴、而載校田目録言上、官即被下省符、猶為口分、須來校園之時除置之、奉寄寺家、承前国司等収公班民既了、今時官吏非所知、但縁事仏事、来年可改之入寺、仍具事状、即附廻使豐貞等、以牒、

承和十一年十月十一日

…中略…

まず冒頭の新島地（本庄地区）の項においては、承和七年に東大寺に返すべき旨を言上したが、それを記載した解文は校田目録の申官（太政官への申請か）の後に作成されたため、当該の畠は百姓口分田として「盛班」されたままになっており、これらを東大寺の庄畠にしてそこから地子を徴収することは来年（承和一二年）の班改以後にしてほしい旨が述べられている。

ここであきらかになることは、一つは承和七年時点での東大寺の要求は庄域内部に存在する百姓口分田の返還要求であること、他の一つはこの返還要求にもとづく庄域内調査は校田とかかわっておこなわれていることの二点である。この二点のもつ意味について八世紀中期の越前国坂井郡の東大寺諸庄との対比で考えてみたい。

坂井郡には天平勝宝初年に巨大な庄園群が集中的に設定される。これら庄園について天平宝字四～五年にかけてなされた校・班田に際し、当時の越前国司が東大寺の諸庄園への圧迫を強めるという情勢のもとで、天平宝字四年の校田の段階で校田駆使は寺家の開いた田を寺田として注せず、ただ「今新之田」と注し、「公田」の目録のなかに入れて官に申請したため、翌五年の班田に際してこれら田地は百姓に口分田として授けられてしまった。そして造東大寺司は次回の天平神護二～三年の校・班田に際し、これら口分田などに転化している耕地の寺家への返還の要求を積極的に展開する。天平神護二年一〇月二一日越前国司解¹⁰は天平宝字四年の校田に際し、坂井郡内の造東大寺司の諸庄園の庄域内に所在する百姓口分田や第三者墾田に転化している庄域内耕地を坪単位に一筆ずつ書き上げている詳細な調査報告書である。

この解状によると、東大寺鎮・三綱らは「望請、依前図券、勘定虚実、若有誤給百姓、更収返入寺家、改正図籍…」としている。具体的には、①「前図券」すなわち以前の校・班田図と立券文とを比較対照して庄域内でありかつ庄域設定以後に開発されたにもかかわらず百姓の口分田・治田になっている耕地を明確にすること、②それら耕地については寺家に返還し図籍を「改正」することを求めて

10、東南院文書二－五一五

いる。すなわち、造東大寺司は天平神護二年の校田に際しあわせて庄域設定以前から続いてきている口分田・墾田についても相博（庄域外の田地との交換）ないしは買得という形で寺田にすべく書き出しを行っているが、主として狙っているのは庄域設定以後庄域内で開発された田地についての「改正」という名での無償没収（それが口分田である場合は国衙の責任で乗田をあたえる）である。この「改正」の論理は庄域設定後に庄域内で開発された耕地はそれがだれが開発したものであっても、すべて東大寺の耕地であるという論理、国家権力による上からの占点に優先権を認める論理であり、造東大寺司はこの論理にもとづいてこの解状で一筆一筆を「改正」すべき田として書き上げ、それにもとづいて坂井郡の校田目録の書き換えを要求しているのである¹¹。

このような八世紀中期の越前で行われている口分田・農民墾田になっている庄域内耕地の東大寺への返還のあり方をふまえて承和七年の阿波にもどる。ここで東大寺使石川真主は校田と対応させながら新島庄庄域内に存在する口分田・農民治田の返還を要求している。これはあきらかに阿波でも承和七年の校田に際して庄域内に存在する口分田・農民治田の「改正」の論理にもとづく返還要求であり、承和十一年国牒の新島地の項にあらわれる解状とは、上記越前国坂井郡でいえば一〇月二日国司解状に相当する、「改正」すべき耕地の書き出しをおこなった阿波国司解状の形をとった調査報告書であった。

すなわち、承和七年の阿波における校田と平行して新島庄庄域の調査がなされ、その結果は阿波国司解状として書き上げられるとともに、それにもとづいて国衙レベルで作成される校田目録においては、これら庄域内口分田・農民治田は庄田畠に書き換えられるはずであった（越前のケースでいう②の過程）。ところが、承和十一年国牒によると、解状の作成は校田目録を太政官に提出した後になってしまい、校田目録の書き換えができなかったようである。「盛班」とあるが、庄域内他者耕地を庄田畠に書き換えさせることができなかったために、当該の耕地は承和七年以後も引き続き口分田として存続しているという意味であろう。この項の見出しに「新島庄地壹拾町参段壹百六十四歩」とあるが、この一〇町余りの耕地は本来ならば承和七年段階で校田目録には口分田から転化した庄田畠として記載されるべき庄域内に存在するものとみてよいのである。

なお、同様な事態は大豆処地区でも起こっていることが次の「大豆津圃」の項であきらかになる。すなわちこの項によると、大豆処地区の場合も庄域内に存在する口分田の書き上げがなされたが（阿波国司解状の作成）、その結果を校田目録に反映させることができず、本庄地区と同じく承和七年以後も寺田畠への転化が果たせぬままに口分田として存在している。さらに勝浦地区についても承和十一年段階で東大寺は地子を徴収していないが、これはこの地区には耕地なかったためであることが次の「勝浦地」の項であきらかにされている。ただ、この地区についても調査は行われていたことはまちがいない。

以上により、承和七年の段階で本庄・大豆処・勝浦の諸地区において、校田に平行して詳しい庄域

11、「改正」について詳しくは拙稿「初期庄園の形成と展開」（『日本史研究』一六四～一六五号、一九七六年）、同「越前国足羽郡道守庄の成立と展開」（岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究』上巻、一九八四年）などを参照。

内口分田・農民治田の調査がおこなわれたことが明確になったが、新島庄のもう一つの地区である枚方地区についてはどうであるか。それについて上に掲げた承和一一一年国牒の構成をみってみる。この国牒のA部分ともいうべきのが、最初から「依去九月七日牒状勘徴」までである。この部分がいままでみてきたように、本庄・大豆処・勝浦の三地区について、項目をそれぞれたてて、承和一一一年段階までその内部の他者耕地が東大寺に返還されなかった理由を述べるとともに、翌年の承和一二年から東大寺が地子を取れるようにすることを九月七日（東大寺）牒状を受ける形で約束している部分である。

それに続いてB部分ともいうべき部分が、「而載校田目錄言上、官即被下省符、猶為口分、須來校園之時除置之、奉寄寺家」の部分である。ここには、校田目錄にのせて上申し太政官が省符（民部省符）を下したにもかかわらず、なお口分田になっている耕地が存在するが、それについては来る校園の時に班給から除き寺家に寄せる旨が述べられている。ここでいう「載校田目錄言上」とは国司解状に記載された庄域内口分田などが庄田畠に変更されて記され、それが太政官に上申されたということの意味する。となれば、B部分が言及している地区は作成された解状の内容が校田目錄に記載されて上申された地区ということになる。ところでA部分であきらかなように、新島庄を構成する四地区のうち本庄・大豆処・勝浦の三地区については解状作成が校田目錄の上申にまにあっていないのであり、B部分が取り上げているのはこの三地区以外ということにならざるをえない。それは枚方地区以外なのである。

つまり上掲国牒のA部分で本庄・大豆処・勝浦の三地区が、B部分で枚方地区がそれぞれとりあげられているとみてよい。そして枚方地区について、その調査がいつおこなわれたのか、直接にはB部分では言及されていない。しかしA部分にあらわれる「校田目錄」とB部分にあらわれている「校田目錄」は別のものとは考えられないのであり、両者とも承和七年作成の校田目錄とみるべきであろう。すなわち、承和七年の段階で新島庄の四地区とも校田と平行して庄域内口分田・農民治田の調査がなされたのである。そしてそのうち本庄・大豆処・勝浦三地区については調査結果を記載した国司解状の作成が何らかの理由で校田目錄の作成にはまにあわなかった。以後それをめぐり東大寺と阿波国衙との間で折衝がなされたのであり、欠年九月七日東大寺牒及びそれへの阿波国衙の返答である承和一一一年国牒の存在はその一端をしめす。そしてその折衝の結果であろう、三地区のうち耕地のある二地区についての校田目錄の書き直しと太政官への上申が行われて承和一二年に班改が行われようとしているのである。一方枚方地区については、校田目錄作成にまにあったつまり目録上では庄域内の口分田の庄田畠への転化は記載され、上申された太政官においてもこの転化を省符（民部省符）によって確定されているとみてよい¹²。

このように新島庄で、承和五年官符にもとづいた庄域調査が二年ずれて同七年に実施が開始されているのは阿波の校田にあわせたためであり、そこで東大寺使真主が求めているのは、「改正」の論理を背景にした校田に際しての、庄域設定以後その内部で開発された口分田・農民治田の返還の要

12、口分田の庄田畠への転化は民部省符による確認をへて実施されていることがここにしめされていることに注意したい。これは本庄・大豆処両地区の場合も同様であり、承和七年以後になされた校田目錄の書き直しに際しても民部省符による確認をえているとみてよい。

求であった。

それについて上掲の国牒のA・B两部分についてC部分ともいうべき部分に「承前国司等…入寺」とある。ここで阿波国司が述べているのは庄域内耕地の班給は前の国司のしたことであり、自分らは預かりしらないが、事は仏事に関することなので返還するということであろう。このC部分については後にあらためてみるが、庄域内口分田の庄田畠への転化を国司が律令官僚として東大寺から催促されながらしぶしぶおこなっている状況がしめされているとみたい。つまり承和七年から始まる運動で東大寺は庄域設定後に庄域内で開発された耕地はそれがだれが開発したものであっても、校・班田に際してすべて東大寺の耕地にすべきものという、国家権力による上からの占点に最優先権を認める論理である「改正」の論理をふるに利用することで、口分田・農民治田に転化している耕地を庄田に転化させることを目指し、一方国衙の方もこの論理には従わざるをえない状況にあったことをしめしているといえる。

なお、高庭庄の場合さらに二年ずれた同九年に庄域調査がおこなわれているが、因幡国の場合この前後の国図としては嘉祥三年（八五〇）の分の存在が知られるのみであり¹³、承和九年校田というものの確証はない。ただ、因幡において東大寺使石川真主は第一に延暦年間の他者への高庭庄の売却は不法な売却であり売却自体が成りたっていないこと、第二に売却が成立していない以上高庭庄の庄地は依然として東大寺の所有地であるから、内部の田地はすべて東大寺に帰属すべきものであるという主張を展開している。これもあきらかに「改正」の論理にもとづく主張であり、その主張は最終的に国図上に寺田という形で記入させることによって始めて具体化する。そうであれば因幡の場合も承和九年校田、嘉祥三年班田というサイクルのなかでの校田年にあわせた「改正」の論理にもとづいた返還運動の開始とみてよいであろう。

以上のことは承和五年の太政官符に依拠して山陽・山陰・南海道諸国で展開する東大寺の庄園回復運動の基本原理になっているのはこの「改正」の論理であったことをしめすとみてよい。先にみた播磨・伊予のケースを考えれば、四国地域で承和七年頃、中国地域で承和九年頃にそれぞれ校田がなされ、このような校田と密接にかかわって「改正」の論理にもとづいて東大寺が庄園回復運動を大規模に展開していったのであり、新島庄・高庭庄における動きはその一端をしめすものであったとすべきである。

二、庄域調査の進行

以上承和七年の阿波における校田とかかわって、「改正」の論理を背景にした東大寺の大規模な庄園回復運動の一環として、新島庄庄域内他者耕地返還の要求がだされ、その具体化のためにまず詳しい庄域調査がおこなわれたことをみてきた。問題はこの承和七年段階における庄域調査がどのような形でなされたのかである。それを直接にしめす史料は存在しないが、庄券第五所収の次の無年号坪付

13、延喜五年九月一〇日因幡国高庭庄坪付注進状案（東南院文書二一五三七）に、「嘉祥三年図帳」があらわれている。

注文に注目したい¹⁴。

東大寺地三十一町二段 券文所注

宝亀四年図被輸公一町四段

二十条十枚方古川里三十四葦依里圃六段

三十五宅圃四段

三十六北圭圃四段

弘仁三年被輸公八町六段七十歩

同条九葦原里三十一新名圃一町

十枚方古川里三圭圃七段

……中略……

定地 二十一町一段二百九十歩
(九)

ここにあらわれている坪々は枚方地区を構成する坪々の一部であり、地区内のうち、宝亀四年（七三）年国図と弘仁三年（八一）国図に「輸公」の地があらわれている坪を書きぬいた坪付注文であり、新島庄枚方地区坪付注文ともいうべきものである。この坪付は券文所注三一町二段＝輸公地一〇町二段七〇歩（宝亀四年図一町四段＋弘仁三年図八町八段七〇歩）＋定地二〇町九段二九〇歩という構成をとっていた。このうち輸公地は坪ごとにその面積を記しているのにたいして、定地は総面積を記しているのみであり、その点でこの坪付は枚方地区の輸公地を坪単位で書き上げた文書といえることができる。

問題はいつの時点でこの輸公地の書き上げがなされたのか、また輸公地とは何かである。それについて、高庭庄の庄園回復運動に際し二人の貴族に売却された庄地を書き上げている承和九年七月二四日因幡国司解状が¹⁵、東大寺地面積＝散田地＋定田という構成で書き上げられていることとの対比に注意したい。因幡国解状でいう東大寺地は天平勝宝八年の高庭庄立券時点の庄域面積を、散田地はそのうちで二人の貴族に売却した地を、そして定田は東大寺が高庭庄地として確保している地をそれぞれ意味する。そして解状においては散田地は坪単位に書き上げられているのに対し、定田は総面積のみが書かれている。すなわちこの国司解状も高庭庄庄域内の他者のものになっている散田地の詳しい書き上げなのである。

この因幡国司解状の構成と上掲の枚方地区坪付の構成とは全く同じである。すなわち枚方地区坪付に「券文所注」とある東大寺地三一町二段は天平宝字二年の枚方地区絵図の右端に記された「三十一町五段」とほぼ同じであり、立券時点の枚方地区の総面積とみてよい。次に「定地」について高庭庄では総面積しか書かれていない定田と対応する存在、すなわち新島庄地として東大寺が把握している地を指すとみてよい。そして輸公地について、坪を単位に書き上げられており、因幡国司解状が散田地の坪単位での書き上げであるのと同じであるところからみて、輸公地は散田地とは対応する存在、すなわち庄域内の他者の地とみてよい。さらに輸公地について国図から抜き出されており、かつ一筆

14、東南院文書二－五三二

15、東南院文書二－五三九

にのみであるが「栗凡直頼治」という注記があることからみて、より具体的には新島庄区域内に存在する口分田および農民治田を指しているとしてよいのである¹⁶。すなわちこの無年号の枚方地区坪付は因幡国より先行すること二年、承和七年におこなわれた新島庄の回復運動のなかでの枚方地区庄域調査にかかわって作成された文書、八世紀中期の庄成立時点に立券文や絵図で確定されていた枚方地区三一町余の広がりの中に所在する他者の地としての輸公地を宝亀・弘仁両国図と対照させながら坪ごとに詳細に書き上げている文書とみてよいのである。

そしてこの承和七年段階における枚方地区の調査をめぐっては、この枚方地区の坪付の作成とならんでもういくつかの作業がなされている。その一つは天平宝字二年絵図への追筆であり、もう一つは枚方地区坪付への異筆記入である。以下、それらについてみていきたい。

まず絵図への追筆について、史料編纂所の新島庄絵図調査¹⁷は枚方地区絵図に記入されている文字について、地形描写は別として、大別して坪付を記した筆bとそれ以外の筆aとがあり、aには表題・地形・地目・地積・方位・境界などの文字が含まれ、bには坪付（その直下に記した「川」などの地目を含む場合もある）・地形の一部の文字が入る。そしてaは地形描写とほぼ同時期に書かれているらしいが、bは地形描写より後に書かれているらしいとする。金田章裕氏はこの指摘をさらに発展させて、坪付（一九条一〇里三一、といった条里呼称）を中心としたbについて、その記入の時期を九世紀の段階にまでさげ、この時期における寺領の所在確認の坪付作成の際にそれとの照合のために追筆されたものとされた¹⁸。

金田氏の指摘の通り、この追筆は寺領確認のためと考える以外ない。すなわち、承和七年作成の国図坪付のように名方郡条里に基づいた輸公地の書き上げをなしうるためには、立券文ないし絵図に名方郡条里が記入されており、国図との間で比較が可能になっていなければならないが、本来の天平宝字二年絵図には条里呼称は記されていない。そのことをふまえれば、絵図への追筆は上記枚方地区坪付の作成にかかわって、すなわち宝亀・弘仁国図と天平宝字二年絵図とを比較し坪付を作成するために、承和七年時点でおこなわれたものとみてよいであろう。

このように承和七年に絵図への追筆がなされるとともに国図と対比しながら上掲の無年号国図坪付（枚方地区坪付）が作成される。図1は絵図の全般的状況を略図化したものであり、図2はその絵図上に枚方地区坪付の記載内容を記入してみたものである。とくに図2のように絵図記載事項と国図記載事項とを対比させると、絵図と国図との間で二点の不自然な食い違いが起こっていることがあきらかになる。その一つは史料編纂所の調査で指摘されている宝亀・弘仁の国図にあらわれる輸公地の圃名と天平宝字二年絵図記載の圃名を比較すると、表1に整理したように西にずれているケースが存在することである。他の一つは国図上では輸公地所在坪とされている「（二〇条）九葦原里三十一

16、なおこの輸公地という言葉の上からのみみると、①新島庄庄田畠でありただ輸租地になっている耕地、②新島庄庄域内にある口分田・農民治田であり地子が東大寺に入っていない耕地、の二つの意味が考えられる。しかし、高庭庄の散田地に対応する存在ということからみて、②とみるべきであろう。

17、「東大寺開田図の調査」（『東京大学史料編纂所報』第一四号、一九七九年、一〇七～一〇八頁）

18、同氏 人文地理学会特別例会（鳴門大会）報告「古代荘園図の機能と表現－讃岐国弘福寺領・阿波国東大寺領の事例－」 一九九四年六月一日

茨本北圃 3,240 川	7	川依圃 4,289 川	12	川辺圃 5 川	11	川辺圭 川	10	堀堀城 川	9	川	8	川	7	I 列
茨本圃 10. 川	6	野依圃 10. 川	1	川辺圃 10. 川	2	圭 8. 川	3	圭 3. 野 川	4	川	5	川	6	II 列
茨本南圃 10. 川	31	宅依圃 10. 川	36	葦依圃 12. 川	35	10. 野 川	34	10. 野 川	33	圭 2. 190 川	32	川	31	III 列
		4. 北圭圃		4. 宅圃		6. 葦依圃								IV 列
		25	沢依圃 10. 川	26	7. 萩圃	揚圃 10. 野 川	27	10. 野 川	28	9. 030 川	29	6. 060 葦圃	30	IV 列
		24	10. 野 川	23	7. 萩圃	1. 沢圃	川	10. 野 川	22	5. 茨圃	川	20	江 19	V 列
			10. 野 川	14	2. 060 野圃	10. 野 川	18	10. 野 川	16	7. 野 川	7. 名圃	19	道 18	VI 列
道	圭 1. 100 川	13	10. 野 川	9. 野圃	10. 野 川	6. 葦依圃	川	10. 野 川	9	圭 7. 180 川	19	5. 治圃	18	VI 列
		12	圭 8. 野 川	11	10. 野 川	10	10. 野 川	9	圭 8. 野 川	8	7	2. 名圃	7	VII 列
			3. 160 北圃	川	10. 野 川	3	10. 野 川	4	圭 6. 160 野 川	5	6			VIII 列
19条10里	20条10枚方里	1	圭 3. 野 川	2	7. 圭圃	川	10. 野 川	4	7. 160 圭圃	川				
		36	10. 野 川	34	10. 野 川	33	圭 3. 300 野 川	32	川	31	10. 新名圃	川		IX 列
	20条9里		入江											

(左上段 絵図記載事項 右下段 国図記載事項)

図2 絵図と国図の比較

みてよいであろう。

さらに西へのずれの程度について新名圖を基準に考えてみると、この圃について国図上に記された「三一坪圃一町」を生かすためには絵図上の三一坪の東堺を「江」の汀線のところにまで西に移動させる以外ない。すなわち絵図上の三一坪を西に三分の二坪分程度ずらすことで国図上の「三一坪圃一町」が「江」の真上にくるという不自然さは解消される。そしてこの新名圖以外の上記表にしめした坪々についても、たとえば絵図上の二〇条一〇里三六坪の宅依圃は国図上では一〇里三五坪（宅圃）としてあらわれるが、これは国図上の三五坪は絵図上の三五坪より西に三分の二坪分程ずれがあるとすれば、絵図上の三六坪に相当くいこんだ位置にあることになり、それゆえの圃名称の同一化とみることができる。同様なことは表に記載された他の坪でもいえる。つまり、名方郡条里への組み込みに際して、方格地割については絵図上に引かれた方格地割より三分の二坪程度西にずれて引かれており、したがって国図上の輪公地所在坪は現実には絵図上に引かれた方格地割より三分の二坪程度西にずれて所在すると推測しておきたい。

このようなずれの存在は枚方地区が吉野川下流域の低湿地の最奥部に位置することと無関係ではない。八世紀中期以後の時間の流れのなかで洪水のくりかえしなどにより、現地の景観は方格地割のずれをふくめ相当な変貌をとげているとみてよい。それだけに絵図と国図との対比は容易ではなかったと考えられるのであり、絵図への追筆は条里呼称のみではなく庄域をとりまく川や水路への江・大川といった記入、あるいは庄域北端の坪並の条里呼称の下への「川」の記入（これは川成の意味か）がなされているのも、景観の変動のなかで絵図と国図との対比が手探りでおこなわれていることの一端をしめすものであろう。そして、さらにこのような対比の困難さとのかわり代で注意したいのは枚方地区国図坪付に本文以外に異筆で記入された坪々が存在することについてである。この坪付には二個所に異筆が記入されている¹⁹。

- ① 一九条一〇里
 三一
 一一里六坪四坪
 七坪一〇坪一二坪
- ② □里一坪二坪

異筆として書き出された坪々をみると、①で書き出された六筆は例外なく弘仁国図で輪公地が所在していない坪の書き出しである。②については里番号が不明であるが枚方地区周辺ということになると一〇里ないしは一一里のいずれとしか考えられない（図1参照）。いずれをとるにせよ①同じく弘仁国図で輪公地が所在しない坪を書き出していることはまちがいない。

この異筆記入の時期とその意味については明確ではない。しかし、書き出された坪々が例外なく輪公地以外の坪々であることをみるならば、輪公地の書き上げの直後にそれとの対比をおこなうために書き上げたとみるのが妥当であり、承和七年の庄域調査の段階でなされている絵図への追筆および枚

19、東南院文書二―五三二

方地区坪付の作成という作業の直後に絵図と二つの国図との対比過程の一環として、枚方地区坪付への異筆記入がなされているとみておきたい。

つまり承和七年枚方地区においては次のような過程で庄域調査がなされたのである。①、まず国図との対比を可能にするために天平宝字二年絵図に追筆がなされる。②、この絵図上への追筆をふまえて枚方地区内と認められる坪々について国図とつきあわせつつ輸公地の書き上げ、つまり国図坪付本文の作成がなされる。③、その上で①と②との整合性の確認が異筆記入という形でなされる。すなわち本文として記入された輸公地所在の坪々がずれはあっても絵図上におさまるのかどうかの確認がなされるとともに、輸公地周辺の状況の確認をかねて輸公地が存在しない坪々をも確認し、輸公地の書き抜きに遺漏がないことを明確にしてそれを異筆という形で国図坪付上にメモしているのである。④、そして以上の過程で枚方地区内部の他者耕地（口分田・農民治田）が一〇町二段余であることが確定されたことをふまえて、正式なそれら他者耕地の書き上げとしての阿波国司解状が作られたのであろう。

枚方地区以外の三地区における承和七年段階での庄域調査について、庄券第五として「一卷九枚無年号国図坪付」があることに注意したい。この文書は現存しないが「国図坪付」とある。そのことと先にみたように承和七年の段階で校田目録への記入をなしえた枚方地区とそれをなしえなかった他の三地区とは別な道をたどっていたらしいことをふまえるならば、この庄券第五の国図坪付は三地区の調査の過程で作成された輸公地を坪単位に書き上げた文書とみるべきものと考えられる。つまり承和七年段階で枚方地区と他の三地区とは別々に調査が行われ、両者別々に国図坪付が作成され、枚方地区のものが庄券第二として、他の三地区のものが庄券第五として整理されたとみておきたい。承和十一年国牒A部分によると本庄地区一〇町余、大豆処地区三町余の庄域内の輸公地の存在が確認されるが、庄券第五の国図坪付はこの輸公地を枚方地区坪付と同じスタイルで坪単位で書き上げたものとみるべきであろう。

なお、本庄・大豆処二地区の輸公地の書き上げに際して、各地区の立券文（絵図）と国図の対比が当然なされたはずである。ところが大豆処地区の現存絵図には枚方地区絵図にみられるような追筆は見当たらない。この地区も八世紀中期の時点で名方郡条里は及んでおらず、絵図に条里呼称が記入されていなかった。したがって、国図との対比に際しては絵図の方に条里呼称の記入がなんらかの形で必要であった。にもかかわらず絵図への追筆はないのは、大豆処地区の場合、対比の上で枚方地区ほどの困難さがなかったということがあったのかもしれない。いずれにせよ、枚方地区以外では先述の①～④の過程のうち、①についてはそれぞれの地区のおかれた状況により方式は異なったのであろうが、②～④については、共通した方式で行われたものとみておきたい。

三、庄域の変遷 ―八世紀中期～九世紀中期―

承和七年の庄域調査の過程についてみてきた。そこで明らかになったのは庄域内における口分田・農民治田の多さであり、各地区で確認されるのは表2に示めた面積である。このような庄域内他者耕地の多さということをふまえ、八世紀中期の庄成立以後この時点にいたる新島庄の動向について枚

方地区を中心に見ていきたい。この地区については、国図坪付により庄域内他者耕地の地区内における広がり状況、および絵図への追筆により地区の八世紀中期以後の変貌の状況が明確になるはずである。以下分析の必要から図2でしめしたように、庄域の北から南にむけて坪並にⅠ～Ⅸの番号をふり、それにしたがって庄域の変動についてみていきたい。

本庄地区	一〇町三段一六四歩
大豆処地区	三町二段
枚方地区	一〇町二段七〇歩
勝浦地区	なし
合計	二三町七段二三四歩

表2 各地区内輸公地面積

大きく見ると、天平宝字二年の時点では地区の北端Ⅰ～Ⅲ列部分が開発済みの庄畠に、Ⅳ列以南は「野」と記された未開地になっており、北端部分が庄域の中心になっていた。それにたいして、宝亀・弘仁両国図にあらわれる輸公地はⅢ～Ⅸ列に所在しており、Ⅰ～Ⅲ列には所在していない。すなわち、八世紀中期から九世紀初頭にかけて庄域内のあり方は大きく変動しているのである。以下、それぞれの動向についてみていく。

最初にⅠ～Ⅲ列について。Ⅰ・Ⅱ列については宝亀・弘仁両国図とも輸公地すなわち口分田・農民治田はあらわれていない。そして天平宝字二年段階で宅や神社が存在しており、庄域北部のなかでもとくに中心的な場であったⅢ列について、宝亀国図には三個坪に輸公地が存在していたことがしめされている（一〇里三六・三五・三四の各坪）が、弘仁国図ではいずれも姿を消している。

校田作業と平行して行われる庄域調査について、越前の八世紀中期段階では六年一班のサイクルのなかでの六年前の校田図との対比という形で行われていた。承和七年の枚方地区の場合も、前の校・班田時点の図との対比で調査が行われたとみるべきである。阿波の校・班田の八世紀後半以降のサイクルは不明であるが、枚方地区坪付で主たる対比が行われている弘仁三年図を承和七年からみて一番最近の国図とみてよいのではないか。枚方地区坪付では一六筆が書き出されているが、宝亀国図から抜き出されている三筆を除き、一三筆が弘仁三年図から書き出されていることがそれをしめす。つまり、天平宝字二年絵図との対比は弘仁三年絵図との間でのみ行われるべきものであった。ではなぜこのように三筆のみ宝亀国図から抜き出されているのか。

注意したいのは、弘仁国図から抜き出された一三筆はいずれも今問題にしているⅠ～Ⅲ列より南部分の庄域についての書き出しになっていることである。つまり弘仁三年図にはⅠ～Ⅲ列には輸公地はあらわれていなかったとすべきである。ただ、絵図と国図との対比を行う立場からいうと、かつての庄域の中心であるこの北端の部分について弘仁三年図にないということで無視するのではなく、なんらかの形でその動向を追跡する必要がある。それゆえにさかのぼって宝亀国図との対比がなされたのであり、その結果Ⅲ列にのみ宝亀国図で輸公地が存在していたことを確認し記入したとみてよいのではないか。さらに絵図への承和七年の追筆においてもⅠ列についての条里呼称の下に追筆で「川」と記されているが、これもやはりⅠ～Ⅲ列の動向の追跡の一端であろう。

このようにⅠ～Ⅲ列部分は八世紀後半の時点で激しい変動にみまわれているようであるが、これは天平宝字二年絵図上に描かれている庄域の北端、Ⅰ列の坪並と大川の間であって大川と庄域との堺をなしている「道」と記された堤防の動向と深くかかわる。この堤防は八世紀中期の立券時点にあっては庄域の中心になっていたⅠ～Ⅲ列の部分を大川の水から守る堤防として重要な役割をはたしていた。したがって、この堤防の造築・補強には大きな力がそそがれていたはずである。しかるに承和の追筆

でⅠ列の坪並にすべて川と注されている。これはこのⅠ列にあった耕地が承和ないしは弘仁の時点で川成に変化していたことをしめすものであり、このことはこの坪並北方の堤防は存在していたとしてもまったく無用な存在になっていたことをしめす。さらに輸公地について、Ⅰ・Ⅱ列には宝龜・弘仁の両国図とも輸公地は存在しないし、さらにⅢ列については宝龜段階で輸公地がかろうじて存在するものの（この輸公地が立券時点の庄畠が転化したものか、農民が新たに開発したものかは不明である）、弘仁段階では姿を消している。

このような堤防や輸公地の動向を合わせ考えると、天平宝字年間以後庄域北端の堤防は手が入れられないまま相当早くの段階でその機能が失われていき、それにともなってⅠ～Ⅲ列に所在した庄畠や輸公地などの荒廃化が進行したとみてよいものと考ええる。これはたんに輸公地のみがなくなったということではなく、弘仁年間にいたるまでの間に堤防が消失し、そのなかでこの部分から耕地そのものがすべて姿を消したことをしめすものである。

次にⅣ列～Ⅸ列の動向について、この部分は絵図でしめされているように、天平宝字年間には一個坪を除き「野」と記されている未開地であった。それが弘仁年間までには輸公地すなわち口分田・農民治田が濃密に分布する地になっている。より具体的に、方格子割の西へのずれを考慮に入れてみておく。弘仁の輸公地は新名圃を除き、Ⅴ列とⅥ列の間を庄域を南北に区切って走っている「道」を中心にはぼ一円的に広がっている。このうち道より南の部分について、Ⅵ～Ⅸの四列の坪並に全て輸公地が存在する。このうちⅧ列についてみると、入江が絵図の三坪の西端を流れているために、絵図上の輸公地の三坪を三分の二坪程度西にずらしてもそれ自体が入江を越えて西にまでのびることはない。同様なことはⅦ列・Ⅵ列についてもいえる。一方、道より北の部分にあるⅥ列・Ⅴ列について、絵図上の輸公地所在坪を西にずらすと、この場合は「地堺」と書かれた堤防を西に越えるとみななければならない。さらに東堺について、道をはさんだⅥ～Ⅶ列の四つの坪並についてはいずれも絵図上では「堺堀城」にそった坪々に輸公地が所在する。これら坪々を西に三分の二坪程度ずらすと、堺堀城から西にやや離れたところから輸公地が西に向けて広がることになる。ただ、Ⅸ列すなわち新名圃については、この堺堀城を東に越えた部分にまで輸公地が広がっていることになる。

さらにこの部分と堤防とのかかわりについてみておくと、まずⅣ列以南の輸公地群を大川から保護する堤防の存在は想定する必要がある。絵図上の庄域北端の堤防はすでに消滅しており、おそらくそれより南のⅠ～Ⅲ列のいずれかの部分に弘仁年間までに堤防が築かれ、それがⅣ列以南の耕地保護の役割を果たしていたのであろう。次に庄域の東堺の堺堀城について、Ⅳ列以南の輸公地群がこの堺堀城にそって南に向かって伸びている。このことはこの堤防が八世紀中期以来引き続き東の「江」からの水を防ぐ上で有効な役割を果たしているのであり、この堺堀城の改修とⅣ列以南の耕地開発は密接なつながりをもって進行していたことをしめすものとみてよい。また、中央のⅤ列とⅥ列の間の道についても八世紀中期の段階ではその両側が未開地であったのに、弘仁の段階ではいずれも輸公地になっている。やはりこの中央の道の補強が耕地開発となんらかの形でかかわっているのであろう。つまり、一部分で耕地が庄域の東と西の堺をなしている堤防を越えているが、基本的に八世紀中期以来の枚方地区内で堤防の改修・補強と平行して、耕地開発が活発に進行しているとしてよいのである。

このように枚方地区については、八世紀後半から九世紀初頭にかけての時点でⅠ～Ⅲ列の荒廃の進

行、Ⅳ～Ⅸ列の開発の進展という対照的な事態が進んでいるとみてよい。その意味するところであるが、まずⅠ～Ⅲ列の動向について、高庭庄において国造の一族である勝磐が庄の開発・経営を「墾田長」として担っていたのが、立券直後に自分の私墾田を負債のかわりに東大寺に寄進しており、庄の開発・経営に失敗したらしいことにもしめされるように、七五〇～六〇年代の東大寺の各地における庄経営が順調に進行しているとはいいがたい。新島庄において、高庭庄における墾田長と同じ位置にいたのはやはり国造一族である粟凡直氏であつたらしい。この一族は中央から派遣されてきた日下部忌寸氏の技術指導のもとに現地において高度な開発技術を駆使して堤防・溝・耕地の開発を担っていた²⁰。しかし、七六〇年代以降その力は失われていっており、堤防・溝の強化や新規の耕地の開発はされないのみでなく、既存耕地の保持もできないままに推移していったとみてよい。Ⅰ～Ⅲ列部分の荒廃化の進行はそのあらわれである。

またⅣ～Ⅸ列の動向について、この部分における口分田・農民治田の濃密な広がりということからみて、この部分の耕地開発および耕地開発の進行に対応して行われた堤防工事の担い手は在地農民諸層とみる以外なかろう。かつて立券前後の段階で造東大寺司により派遣された日下部忌寸氏は高度な低湿地開発の技術を駆使し新島庄建設を進めた。しかし八世紀後半の東大寺の開発活動の低下のなかで日下部忌寸氏の導入した低湿地開発にかかわる高度なレベルの技術は東大寺の庄域開発には十分に生かされいるとはいえない。しかし、弘仁の国図にみられるようにこの部分が豊かな農民開発の場に変貌しているということは低湿地開発の技術を在地農民諸層が積極的に吸収しつつ着実な成長を始めていることをしめすものである。具体的に、在地農民諸層がそれら技術を駆使しつつ、Ⅰ～Ⅲ列のいずれかに大川からの水を防ぐ堤防が再建し、さらに東堺の堺堀城についての補強や改修をおこなうなかで内部の耕地開発の事業を完成させていったものと考えたい。

問題はこの期間において東大寺がどの程度庄園としてのこの枚方地区を把握していたのかである。先にみたように、枚方地区坪付は東大寺地＝輪公地＋定地の構成をとっており、理念的に東大寺地であるはずの定地はその総面積（二一町余）が記されているのみである。高庭庄の場合、承和九年七月の国司解状が輪公地に対応する散田地についての坪単位の詳しい書き出しになっているのにたいして、定地に対応する定田については総面積のみ記載になっている。しかし、この国司解状と同日付けで高庭庄庄預が「損益帳」を作成し、そこで承和九年段階の定田の状況を坪単位で詳しく書き上げて寺使真主に提出している²¹。それにたいして新島庄の場合、庄預の作成した「損益帳」に該当する帳簿は見当たらない。したがって定地とされている地内部に既耕地（庄田畠）がどの程度あり、どの坪に所在していたのか、あるいは方格地割のずれが庄地把握にどのような影響を与えているのかなどはつかめない。

ただ、定地二一町は絵図上で確認される枚方地区総面積三一町から輪公地一〇町を機械的に差し引いた面積として表示されるのみであることと、庄域内他者耕地の多さと関連させてみた場合、承和の

20、八世紀中期における日下部氏の活動については、拙稿「瀬戸内型の荘園」（『新版・古代の日本』第二巻・中国・四国編）所収、一九九一年）参照。

21、承和九年七月二一日 高庭庄庄預僧靈俊解（東南院文書二・五三八）

時点で東大寺は庄田畠をほとんど把握していなかったとみてよいのではないか。その所在地についてであるが、Ⅰ～Ⅲ列には耕地そのものが残っていた可能性はなく、庄田畠が残っていたとすればⅣ～Ⅸ列の農民開発地内部にそれと並存する形で残っていたとみるのが妥当であろう。つまり、農民開発が南に向かって伸びていくのに対応して庄田畠もやはり南に向かって伸びていくということであるが、たとえそうであったとしても量的には極めて少なかったのではないかと考える。

以上主として枚方地区の動向についてみてきた。それ以外の三地区については表2でしめされるように、勝浦地区は耕地はないが本庄地区・大豆処地区には輪公地が存在する。これら輪公地は枚方地区の輪公地と同性質のものであり、宝亀・弘仁両国図にあらわれている庄域内口分田・農民治田である。これら輪公地も枚方地区と同じ経過をへて蓄積されていったのであろう。大豆処地区についていえば絵図に書き込まれていた堤防について、どのような経過をたどったのかは九世紀段階の追筆もないのでつかめない。しかし枚方地区と基本的に同じ道をたどったとすれば、この地区における輪公地の形成はこの堤防改修工事の在地農民の手による推進と対応したものであるとみてよく、おそらく西岸の浜をとりまく二本の計画堤防が在地農民の手により完全なものになっていくなかで大川に平行して走る堤防に接している浜内部の坪々が口分田・農民治田になっていったのではないか。なお、この二地区についても庄田畠は存在していてもごくわずかなものではなかったかと考える²²。

以上は八世紀中期以後九世紀初期の弘仁三年にいたる間の庄域内開発の動向である。これ以後承和七年にいたる約三〇年の間の庄地内開発の動向については承和七年に作成された「校田目録」に記載されているのであろうが、内容は不明である。ただ、引き続き在地農民の開発の舞台になっていたことはみておいてよい。承和七年に阿波に來た真主がみたのは新島庄庄田畠の極度の減少ないしは完全な衰滅と、それと対照的な約一世紀にわたる在地農民の開発の成果としての庄域内における口分田・農民治田の大幅な増加という事実であった。新島庄における承和年間の庄園回復運動はこのような庄域内に広がる口分田・農民治田を庄田畠に奪い返すべく始められた運動であった。

四、庄園回復運動の第二段階 一承和一二一年以後

再び承和七年に戻る。この年の六月に庄域内口分田・農民治田について立券文と国図とを比較対照しての調査がおこなわれ、その結果について詳しく書き上げた阿波国司解状が作成された。しかしその結果が校田目録への記載と民部省符による承認という形で国衙・太政官レベルで庄田畠への転化が完了したのは枚方地区のみであり、他の三地区は解状の内容が校田目録に記載されていなかったことは先にみた通りである。ただ、承和七年以後も返還要求は続けられていくのであり、承和一一一年国牒で本庄と大豆処二地区の口分田は翌年の承和一二年の班改に際して寺家に返還するといっているところからみて、一二年の時点では庄域内他者耕地の庄田畠への転化は国衙・太政官レベルでは完了したとすべきである。

しかし承和一一一年国牒によると、枚方地区について承和七年段階ですでに庄域内の口分田・農民治

22、大豆処地区及び勝浦地区については、本稿では詳しく分析しなかった。考えるべき点が多いので別稿を期したい。

田の寺田畠への転化の民部省符による承認がされているにもかかわらずそのうちの一部が依然として口分田などのままになっている。さらに現存している庄券第五に収められている嘉祥三年一二月一〇日新島庄長家部財麻呂解²³に注意したい。この解状は本庄地区内部にある公地二町一八〇歩の書き上げである。この場合の公地は輸公地と同じ意味であり、口分田・農民治田を指すとみてよいが、嘉祥三年といえば国図上での本庄地区の庄田畠への返還が完了した承和一二年をへだたること数年である。にもかかわらず承和一二年段階で一〇町余であった庄域内口分田が二町余に減少しているものの依然として残っている。つまりこの場合も枚方地区の承和一一年段階と同じく、まだ返還がすすんでいない口分田が庄域内に存在するのである。

このような民部省符による転化の確認以後における口分田・農民治田の残存をどのようにみるかとのかわり、ほぼ同時点の元興寺の愛智庄についてみていきたい。この庄は八世紀中期に買得により成立した庄園である。庄成立後一世紀を経過した嘉祥元年（八四八）から貞観元年（八五九）にかけて元興寺の僧延保が検田使となり、庄田の回復運動が行なわれる。貞観元年一二月二五日近江国依智庄検田帳²⁴は十余年にわたった回復運動の経過および結果について、どれだけの田地を回復したか、回復した田地各筆について回復がどのような形で実現していったのかを書きあげたものである。その史料の必要部分をしめしてみる。

近江国依智庄検田使

勘匡水田事

合参町参百壹拾歩

一町百八十歩	勘加地子	… 1
三段二百八十歩	方付指換并増地子	… 2
二段二十歩	本自常荒、今勘見熟	… 3
二段七十歩	成百姓家、今勘取之、令進地子	… 4
七段二百十四歩	成百姓治田、今勘取之	… 5
四段二百六十六歩	成公田、今勘取之	… 6
以上目録		

右件水田、挂畏勝宝感神聖武皇帝、以先帝施納物、以去天平勝宝五・六年所買也。自爾以降、或坪上品而被名中下田、或坪百姓之間指換、其方取沃壤地、以移薄鹵處、或坪本自見熟、而称常荒、或坪成百姓家、不進利地、如是之類触端有数、爰使延保投身於龍樹聖天、歸命乎自在天神、任理勘匡每色惣畢、…

検田帳の冒頭の部分であるが、「目録」として一〇年間にわたる延保の庄田返還の努力の成果として確保した三町余の田地の内訳を六項目に整理して書き上げている。これは大きくは二つに分類される。一つは1～3である。1は庄田の田品の下から上への格上げがなされた田地である。2は同一坪内での肥沃な田地への庄田の移行とそれによる田品の格上げに成功した田地である。3は庄地内で常荒であった地の熟田としての把握に成功した田地である。三者とも元興寺が庄田ないし庄地として把

23、東南院文書二一五三三

24、平安遺文一一二八

握してきた地の把握強化の成果を記したものである。他の一つは4～6である。4は庄地が百姓の家になっていたのをとりかえした田地である。5は同じく庄地が百姓治田になっていたのをとりかえした田地である。6は公田になっていたのをとりかえした田地である。三者とも庄田・庄地であった地が他者の耕地・家に転化していたのをとりかえして庄地・庄田として再把握した成果を記したものである。そして以下本文で各坪ごとに1～6のいずれかの形をとって寺田として把握できるに至った過程を克明に記している。つまり検田使延保の努力の一つは存続している庄地の把握強化、一つは他者の手に渡っていた土地のとりかえしという二つの側面から成されているのである。

ここにみられるような従来から保持している庄地の把握強化と他者の手に渡っている耕地のとりもどしという二つの側面からの庄園の再編強化という元興寺の志向は今までみてきた新島・高庭両庄で東大寺が志向していたことと全く同じである。このことをふまえると、承和五年の東大寺の庄田回復を命じた太政官符と同じような元興寺の庄田回復を命じた太政官符が出され、それにもとづいての庄田返還の運動がおこなわれているとみてよい。延保の愛智庄における活動もそのような元興寺の回復運動の一環として行われているとみるべきである。

検田帳についていえば、庄田の回復状況が一筆一筆克明に記されており、それについてはすでに原秀三郎氏により詳細に分析されているところであるが²⁵、延保は庄域内耕地の一筆一筆をめぐって在地農民たちと論争しつつ、田品通りの地子を取りたてる、あるいは農民の治田・口分田になっている田地を奪還していつている。その際、「治田主、屈理、即進地子」あるいは「今任理勘伏、令進地子」などとりかえしのべているように、「理」＝ことわりを行動の原理にすえている。この延保の「理」が、元興寺に施入された地内部にある耕地は誰が開発しようが、それは元興寺が地子を定め徴収すべき権限をもつものという「改正」の論理に支えられたものであることはあきらかである。

ただ、このような延保の在地における活動の前提には校田図上での当該坪についての口分田・百姓治田から元興寺庄田への記載の変更とそれについての民部省符による確認という過程の存在をみておく必要がある。すなわち、元興寺の庄田回復を命じた太政官符を出発点にした庄園回復運動の第一段階として国衙・太政官による庄田畠への転化の確認、「改正」の論理にもとづき庄域内口分田・農民治田の庄田畠への転化を近江国衙に承認させかつ太政官にも上申して民部省符を確保するという過程が存在する。そしてそれを背景にして回復運動の第二段階として第一段階を背景にした在地におけるとりもどしの作業の具体化という過程が存在するのであり、検田帳はこの第二段階の過程を克明に記載したものである。

つまり元興寺・東大寺などの王臣家・寺社の立場に立てば、庄田回復運動は「改正」の論理の徹底である。そしてその具体化のためには二つの作業を必要とする。一つは国衙および太政官からその承認をとりつける作業である。他の一つは国衙および太政官が承認しているこの論理を在地において定着させるために、直接に使者を現地に派遣し、その使者を中心に一筆一筆についてその置かれた状況を明確にしながらのとりもどし作業である。「改正」の論理の貫徹すなわち庄園回復の実現のためにはこの二つの作業は密接不可分なものとして行われる必要があった。

25、同氏「田使と田堵と農民」（『日本史研究』八〇号）

以上のことをふまえて新島庄にもどる。先にみたように承和一二年の段階までで基本的には庄域内口分田・農民治田の庄田畠への転化が校田図上で認められており、かつそのことについての民部省符も確保されている。しかし愛智庄のケースでしめされるように、それのみでは庄園回復運動の半分が完了したにすぎないのであり、民部省符確保までを第一段階とすれば、それを前提とした第二段階としての在地における現実の返還作業を必要としたのである。具体的には、第一段階については枚方地区では承和七年ないしその直後に完了し、本庄・大豆処・勝浦三地区については承和一二年に完了する。そして第二段階はこの第一段階の完了とともに、すなわち枚方地区は承和七年頃から、他の三地区は承和一二年頃から動き出すとみてよい。先に見たように第一段階で確認された庄域内他者耕地は各地区合わせて二四町にたつするが、これらを在地において現実に庄田畠に転化させ、あわせてこれ以外の定地の把握強化をしていくことが第二段階の目的であった。

しかしこのような作業は東大寺の庄園としてのゆきずまり以後、その庄域内を舞台に一〇〇年近くにわたり開発活動を積みあげてきた在地農民諸層の活動の成果である耕地を無償で奪いとることである。口分田については代替えを国衙が保障するにしてもそれは容易なことではなかったはずである。そのことは承和十一年国牒にもしめされている。すなわちA部分で三つの地区について校田目録での庄田畠への転化の記載がなされなかったこと、つまり第一段階が承和七年の段階で実施されなかったことがあきらかにされている。そしてB部分で第一段階が承和七年に実施された枚方地区では第二段階が完全には進行していない状況があきらかにされている。このことは庄園回復運動の実施すなわち「改正」の論理の貫徹については、校田目録の作成という国・郡衙レベルでの第一段階でも、さらに民部省符で庄田畠への転化が確認されてそれを在地において現実化する第二段階でもさまざまな強い抵抗があったことをしめしている。

さらに国牒のC部分で阿波国司は庄域内他者耕地の庄田畠への返還を約束しつつ、このような庄田畠の班給は前の国司のしたことであり自分らは預かりしらないことであるが、事は仏事に関することなので返還するのだという、ややなげやりともとりうることをのべている。これは律令官僚として「改正」の論理にもとづく国図上での庄田畠への転換の作業には協力してきたし、さらに第二段階についても庄田畠へ転化する代わりの口分田の手当などに努力してきたが、在地農民諸層が自分の力で開発して口分田としている耕地を庄田畠に転化することがいかに困難であり、国司の力をもってしても容易でないことをA部分・B部分をふまえながら東大寺ににおわせているのではないか。

新島庄の場合、愛智庄の検田帳に対応するような第二段階の進行過程を具体的にしめす史料が存在しない。そのため承和七年に真主、承和十一年に豊貞が東大寺から阿波に派遣されてきているが、彼らが在地における口分田の庄田畠への転化にたいしてどのような役割を果たしたのかをふくめ、第二段階の進行過程についてはほとんど不明である。ただ、注意しておきたいのは嘉祥三年に新島庄本庄地区の「庄長」として「家部財麻呂」があらわれていることについてである²⁶。

家部氏の一族は延喜二年（九〇二）に作成された板野郡田上郷戸籍²⁷に多くあらわれている。こ

26、嘉祥三年二月一〇日 新島庄庄長家部財麻呂解状（東南院文書二一五三三）

27、平安遺文一一八八

の田上郷戸籍について、川上多助氏が第二次世界大戦以前において、記されている戸のうちの一つは女性戸口が男性戸口の七倍以上に達していること、また七〇才以上の者が記載者の三分の一以上いることなどのことから、その記載内容はまったく信用することはできないとして、史料的な価値を否定された²⁸。つまりこの史料は使われたとしても、律令制の衰退にともなう地方政治の乱れを具体的に示すものとして取り上げられるだけであった。しかし、第二次大戦後の研究により、一見でたらしめようでもそのなかには多くの事実が反映されていることが明らかになってきた²⁹。すなわち、この戸籍にはまったく存在しなかった人物が記載されているのではなく、性別・年齢については疑点があり、かつ記載人物が延喜の時点に生存していたとはいえないにせよ、九世紀のいずれかの時点で田上郷で生き、活動していた人々が記載されているとみてよいことが明確になってきている。戸籍の内容を見ると、ここには八郷戸主、三三氏族、四四〇名が記載されている。三三氏族のうち、凡直氏、粟凡直氏、家部氏、物部氏、服部氏の六氏族が全体の七割を占める。また八郷戸主のうち戸主名不詳戸一戸をのぞく七郷戸主のうち、一郷戸主が凡直氏、三郷戸主が粟凡直氏である³⁰。そして家部氏は人数こそ多いが、粟凡直氏に比較すれば有位者・戸主とも少なく、あきらかに一般農民という色彩が強い。

以上のような田上郷にあらわれている状況は九世紀の吉野川下流域の板野郡全体に共通している状況とみてよいのであり、六～七世紀以来の有力豪族であり、かつ国造一族である粟凡直氏が依然として優勢な一族として存在するとともに、他の一面で家部氏に代表されるような一般的農民が大きな比重を占めていたのである。そして嘉祥二年の新島庄本庄地区の庄長として署名しているのが粟凡直氏ではなく、この家部氏であった。

家部財麻呂は「新島庄長家部財麻呂解申…³¹」とあるところからみて、本庄地区のみの庄長ではなく、四地区をもつ新島庄全体の庄長とみてよいであろう。彼がいつ庄長に起用されたのか不明である。ただ、八世紀半ばの庄成立の段階では国造一族である粟凡直氏が「墾田長」として新島庄を現地で支えている存在であったが、そのもとで八世紀後半の庄経営はゆきずまっていたのは先に見た通りである。そのようななかで承和七年に庄園回復運動を開始した東大寺は伝統的な豪族である粟凡直氏に依存するのではなく、この時点では一般農民層に属するが田堵などとしてその力を増しつつあったのであろう新興農民層としての家部氏を意図的に庄長として起用したとみるべきであろう。つまり国衙・太政官機構を通しての「改正」の論理の押し出しとならんで、それを在地においても現実化する手だてとして新興農民層としての家部氏を庄長に起用しているのである。

新島庄の場合、第一段階は承和七年から一二年にいたる過程で一応は完了し、以後引き続き第二段階に入っていくが、当然のことながら愛智庄で検田使延保がおこなったような作業、庄域内で活動する田堵層を中心とした在地農民諸層と激しく対立しつつ「改正」の論理を背景に一筆一筆を庄田畠に

28、同氏「古代戸籍考」（『日本古代社会史の研究』、一九四七年、所収）

29、第二次世界大戦以後の田上郷戸籍の研究については、泉谷康夫「現存平安時代戸籍の考察」（『日本史研究』三九号）、平田耿二「平安時代の戸籍について」（同氏著『日本古代籍帳制度論』、一九八六年、所収）、松原弘宣「板野郡田上郷戸籍にみえる氏族」（同氏著『古代の地方豪族』、一九八八年、所収）などを参照。

30、詳しくは松原前掲注29著書参照。

31、注26文書参照。

奪い返していく努力を必要としたのであり、東大寺から派遣されてきている検田使は庄長として起用されている家部氏と組んでその作業を進めていったのであろう。しかしこの第二段階の過程が在地農民諸層の抵抗にあって曲折にみちた過程をたどっているらしい。嘉祥三年に庄長が本庄地区内部の庄地の書き上げを行っているが、このことは承和七年以後嘉祥三年にいたる少なくとも一〇年間にわたって新島庄諸地区において庄園回復に向けての努力がなされているにもかかわらず、庄域内に他者耕地が残存していること、「改正」の論理の全面的貫徹にはいたっていないことを意味する。「改正」の論理の貫徹、とくにその在地における実現（第二段階）は容易とはいえないのである。

五、九世紀の阿波における庄園回復運動 ―結びにかえて―

以上、承和七年に始まり、少なくとも嘉祥三年までの一〇年は続けられていた新島庄を対象にして東大寺の手により行われていた庄園回復運動のあり方、及び八世紀中期の立庄以後そこにいたるまでの新島庄の歩みについてみてきた。以下、まとめをかねて、八世紀中期から九世紀にかけての阿波という地域における歴史のなかに、この回復運動を位置づけてみておきたい。

寛平八年（八九六）四月二日太政官符「応停止諸寺称採材山四至切勘居住百姓事」³²をみると、そのなかで相楽郡郡司は「東大元興大安興福寺等採材山在泉河辺、或五六百町、或千余町、東連伊賀、南接大和、今大河原有市鹿鷲等諸郷百姓口分并治田家地多在此山中、因此人民之居各逐水草、沿河披山群居雑所、子々孫々相承居住、推其年期、及百余年…」とのべている。百年前といえば、それはちょうど七八〇～九〇年代という山背（城）盆地への遷都の時期に相当する。この時期を始点に、以後一〇〇年にわたりこの伊賀・近江・大和・山城四国の国境地帯の山間部で変動が進行しているのである。それは具体的には、第一にこの山中における人間の活動の場のより奥地に向けての拡大であり、第二にこのような人間の活動の場の拡大とからみあう形での王臣家などの外部からする大規模な植設定の進展である。さらに『日本後紀』延暦一八年（七九九）十一月一四日³³条に「備前国言、児島郡百姓等、焼塩為業、因備調庸、而今依格、山野浜島、公私共之、勢家豪民競事妨奪、強勢之家弥栄、貧弱之民日弊」とある。児島郡は瀬戸内海海辺部の山野河海の世界に属する塩生産地の一つであり、共同所有と共同利用の原理にもとづく秩序をもつ共同体が存在し、その規制のもとで塩山木の利用がなされていたのであろうが、この時期からこの山を対象にした勢家豪民と表現される共同体内の有力層や外部から入込んでくる王臣家・寺社の囲いこみが展開し始めているのである。

このように八世紀末頃から九世紀にかけて、畿内の山間部や瀬戸内の沿岸部という山野河海の世界において、平野の世界から流入する人々などを担い手にする山中や海辺部における人間の生産活動の場の拡大とそれを追う形での東大寺などの王臣家・寺社の大規模土地占点が急速に進行し始めているのであるが、それではこの段階の阿波の動きはどのようなになっていたのか。それについて、後に延喜式で式内大社とされた阿波の三座である大麻比古神・天日鷲神・天石門和氣八倉比売神の三神が神階

32、『類聚三代格』巻一六（『新訂増補国史大系類聚三代格』五〇二頁）

33、『日本後紀』同日条

を授与されるという形で正史に登場してきていること³⁴、および美馬郡からの三好郡の分離や名方郡の名東・名西両郡への分割など郡の分立がなされていることの二点が九世紀段階でなされていることを手掛かりにみていきたい。

まず三神への神階授与、とくに天日鷲神・天石門和気八倉比売神の二神への神階授与についてみておく。天日鷲神は忌部社ともいわれ、麻殖郡山川町山崎の背後の山上の吉野川を見下ろす場に鎮座している。山崎の地は吉野川ぞいにあって津もあるとともに、吉野川ぞいの平野地帯から麻殖郡山間部の四国山地（後の種野山）に入っていく山口の地になっている。このような山崎の置かれている位置からみて、この神は山口の神あるいは二つの世界の境の神と見てよいであろう。もう一つの神である天石門別八倉比売神は名方郡にあり、気延山の南につづいている小高い山（杉尾山）の山頂に鎮座するが、この山は矢野神山とも呼ばれ昔から山全体が信仰の対象とされてきた。この山は吉野川下流域の平野からよくみえており、鮎喰川溪谷への入り口に当り、その点でここに祭られている神も吉野川下流域の平野地帯と名西山分を中心とする山の世界の山口に祭られた山口の神、境の神であるとみてよいであろう³⁵。

このように九世紀の段階で、平野の世界と山の世界との境の地に位置する神社が神階授与ということで正史に登場してくるということの意味について、都が山城盆地に移った延暦四年に九州諸国にたいして、百姓が浮浪としてこの他界に流入し、「本郷為墟」という状況を生みだしているのので、従来これらの人々に課してきた「他界浪人課役」をやめ、調庸を課するようという官符をだしていることに注意したい。この官符³⁶に示めされている動きは畿内・瀬戸内における山野河海への人間の活動の場の拡大と時を同じくしており、ここでいう他界への人々の移動の一つの大きな側面として山の世界としての九州山地に向かっての人間の生産活動の場の拡大ということが存在していたとみてよい。

広大な四国山地を平野の世界の背後にもつ阿波は九州諸国と基本的に同じ状況にあったとみてよいのであり、新島庄諸地区における開発の進行に示めされる平野部の低湿地開発の一層の進展とならんで平野の世界から山の世界（四国山地）への人間の流入や二つの世界の交流の活発化の進展は考えられるところである。正史にあらわれる二座の神が山口に位置しているということは、八世紀末には阿波でも畿内・瀬戸内や九州と同様に、麻殖・美馬・三好の広大な四国山地に向かっての吉野川流域からの人々の流入の開始、山の世界における生産活動展開の場の拡大が開始され九世紀にはそれが大きな動きとなるなかで、二つの世界の境に位置するこれらの神が阿波国内で重要な位置づけをもつ神として九世紀後半にはクローズ・アップされてきていることをしめすものである。

このような平野の世界の周辺部、さらにはその外部の山野河海の世界における人間の活動の場の拡大を別な形でしめしているのが郡の分離である。まず美馬・三好の分離について、麻殖郡より上流は

34、天石門和気八倉比売神については承和八年（八四一）八月に正八位上が（『続日本後紀』同年八月二日条）、天日鷲神については嘉祥二年（八四九）四月に従五位下が（『続日本後紀』同年四月二日条）、大麻比彦神については貞観元年（八五九）正月に従五位上が（『日本三代実録』同年正月一日条）、それぞれ授けられているのが正史への初出である。

35、阿波における平野の世界と山の世界の関連については、注3拙稿でその一端について述べておいた。

36、『類聚三代格』巻八に収められている延暦四年（七八五）二月九日太政官符「応徴大宰管内九国互浮浪九国調庸事」（『新訂増補国史大系類聚三代格』三三九頁）を参照のこと。

美馬郡であるが、この美馬郡から三好郡が分離するのは貞観二年（八六〇）である³⁷。分離前の美馬郡は吉野川ぞいの狭い平坦地を除き、大半は山の世界でしめられる。その美馬郡のうちの上流部分にあたる部分が三好郡として分離したということは、この時点の吉野川上・中流域の山の世界における開発の進展しつつあることを意味する。天日鷲神社が九世紀において阿波の有力な神社として登場してくるのもこれに対応する。

さらに名東・名西両郡の分離について、吉野川下流域に広がる名方郡についていえば、八世紀中期においては、川ぞいの低湿地に立地する新島庄域のある地が開発の最前線であった。そして庄としての開発がゆきずまった後も、八世紀末から九世紀初期にかけて、在地農民の手により開発が着実に進行していることは先にみた通りであり、平野の世界の外縁部における低湿地開発は衰えをみせていない。そしてこのような低湿地開発は吉野川下流域低湿地帯を河口にむかって、すなわち東にむかってのびていくとみてよい。寛平八年（八九六）にはこの名方郡は名方西（名西）郡と名方東（名東）郡とに分割されているが³⁸、これは新島庄庄域をふくめた名方郡東部の吉野川低湿地帯における河口に向かった開発の進展と耕地の蓄積、および山間部である後の名西山分における生産活動の活発化の両者があって始めてなされたものとみるべきであろう。また、八倉比命神社の正史への登場もそのような動きを背景にしたものである。つまり阿波においても、八世紀末から九世紀にかけて平野の世界からの人間の流入を伴う四国山地の世界における人間の活動の場の拡大や、海に向かった低湿地開発の進展という事態が進行しているのである。先にみた吉野川下流域の平野部における古くからの豪族である栗凡直氏の勢力の衰えとそれにかわる家部氏などの新興農民諸層の台頭という事態の進行もこれに対応したものであろう。

先にみた寛平八年官符にしめされているように東大寺や元興寺は畿内山間部で積極的な大規模土地占点を展開している。これは巨視的にみると、八世紀末の延暦年間ごろから九世紀にかけて勅旨田・親王賜田などの形をとって進んでいく王臣家・寺社の大規模土地占点の一環とみてよいであろう。つまりこのような大規模土地占点の展開はこの時点の在地における農民諸層の開発の動きが山野河海の世界にまでのびていくような開発活動の活発化に対応してなされているものなのである³⁹。そしてこのような農民開発の進展に対応した王臣家・寺社の占点地確保の動きはたんに新規に占点地を確保するということにとどまらないのであり、八世紀中期に成立していた占点地（庄園）についてのあらためての把握強化ということに及んでいった。東大寺が阿波の新島庄をふくめ中・四国地域を中心に庄園回復運動を承和年間に展開しているのはそれをしめしている。

その際見ておきたいのが、新島庄が位置しているのは阿波の平野の世界の最周辺部であり、庄域が八世紀後半から九世紀にかけての阿波の平野の農民諸層にとっての耕地開発活動の最先端の部分になっていたことである。また、高庭庄の場合も鳥取平野の外縁部に所在し、新島庄が置かれている

37、『日本三代実録』貞観二年三月二日条

38、昌泰元年（八九八）七月一七日太政官符「応省名東郡主帳一員置名西郡事」（『新訂増補国史大系類聚三代格』三一五頁）

39、八世紀前半における大規模占点の展開については、石母田正「古代の転換期としての十世紀」（『古代末期政治史序説』、一九五六年、所収）、拙稿「延喜庄園整理令と初期庄園」（『史林』六一―二号、一九七八年）などを参照。

のと同様な場に位置する。これらのことは東大寺は畿内山間部において農民開発の場を上から囲い込む形で新規の大規模土地占点を進めようとしているのと同様に、それまで存続してきている占点地の再把握の運動も九世紀中期において農民開発の活動が活発におこなわれている平野の世界の外縁部に設定されている占点地に対象をしばってなされていることをしめすのではないか。回復運動の対象になっている吉野川下流域低湿地帯の最奥部に位置する新島庄はその典型であるといつてよい。